

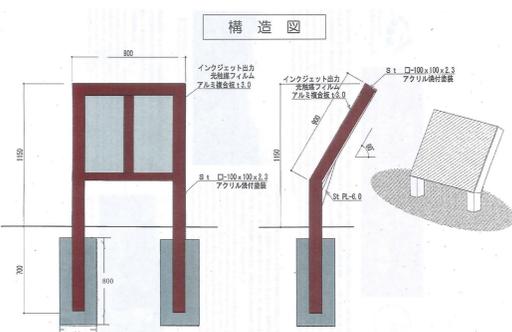
武川正人、加賀谷にれ、田仁孝志、畑吉晃、中谷麻美（洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会）

洞爺湖有珠山ジオパークは、2009年に世界ジオパークに認定された「変動する大地との共生」をテーマとしたジオパークである。設置当初の解説看板は、正確な情報提供を第一とし、研究者や学芸員による記述で統一した。ジオパークの活動を進めて来た現在、地域内で研究や学習、経験を重ねたガイドも増えてきたことから、解説看板の役割を再考し、一般の来訪者が理解しやすく、地元ガイドの効果的な案内に役立つ看板づくりをめざして取組を始めた。

1. 経緯と現状

洞爺湖有珠山地域では、2016年現在、47の解説看板を設置している。初期のものでは設置から約10年が経過し、日焼け・積雪・いたずらによる表面の劣化が見られてきた。

修繕は、設置者である各構成市町が計画的に行っているが、この修繕を機会に、掲示内容をより理解しやすく、ガイドが効果的に使えるものへと改良するために、当協議会において2016年度より解説看板製作のガイドラインの作成を目指すこととした。



解説看板の共通仕様
視界を遮らずに読みやすく傾斜をつけている



2. ワークショップの開催

ガイドラインの作成に向け、多くの関係者やガイドから意見を集めるため、ジオパーク内でガイド活動を行っているガイドや火山マイスターを中心メンバーとしたワークショップを開催した。

第1回「見やすい・使いやすい解説看板を考える」(2016.6.23開催)

講演 「ジオパークにおける情報発信」
大野 希一 氏 (島原半島ユネスコ世界ジオパーク)

問題提起1 情報をどうやって伝えるか

- ★各情報ツールのメリット、デメリット
- ★客層に合わせた情報操作の必要性
- ★看板ならではの発信機能は何か？

問題提起2 看板の内容

- ★載せるべき情報
 - ・最低限の学術情報
 - ・防災上、伝えるべき専門用語 (火砕流、火砕サージ等)
- ★デザインの工夫
 - ・写真での比較は変化を伝えやすい
 - ・文字は少ない方が良い
 - ・キャッチフレーズ的な看板タイトル



参加者からの意見

- ★ガイドが付かないお客様にも情報を伝えたいので、看板は必要。
- ★専門用語が多いと感じた。
- ★言葉使いや写真の工夫によって、理解度に差が出る。
- ★写真は特に海外客の理解を助けてくれる。
- ★ガイドする立場として、どんな情報であれば使いやすいか、現地で確認したい。等

第2回「解説板をみんなで作ってみよう！」(2016.7.20開催)

フットパス四十三山 (よそみやま) ルートを歩き、
① **コース全体で「伝えたいこと」** ② **解説看板の内容** を考える。



★実施方法

- ・参加者を2チームに分け、それぞれ①⇒⑫、⑫⇒①で歩く。
- ・既存解説看板のデータと、位置、内容をチェック。
- ・終了後、会場に集合し、2チームそれぞれ意見を発表。
- ・各解説看板のキャッチコピー、内容を全員で考える。
- ・看板の内容修正に向けたガイドラインを作る。

★参加者からの意見・提案

- ・主テーマは100年前の噴火から現在に至る、森の成長。
- ・「火山」「植物」、2つの切り口が楽しめるコース。
- ・説明内容はその場から見られるものに絞る。
- ・ベンチがあり、ゆっくりできる所は、内容を多くして良い。
- ・コース全体の中の現在位置を示したい。
- ・1枚の面積が大きいので、「火山」「植物」で色分けするとわかりやすいのでは？
- ・地図は「北を上」「高低差」「現在地」を示して統一。
- ・ビューポイントにはカメラマークをつける。
- ・看板の柱に番号をつけ、迷った人が通報しやすいようにしては。

★看板タイトル(キャッチフレーズ)の提案

現タイトル: 「火山回道 噴火口をめぐる道 噴気孔」

「100年前から続く噴気孔」

「湯気が出るナゾ」



3. 今後の方針

洞爺湖有珠山ジオパークでは、これから数年にかけて、既存看板の更新作業が進められる。設置者とジオパーク推進協議会が綿密な連携をとり、より来訪者にとってわかりやすい解説看板にしていくため、本ワークショップにおいても、環境省北海道地方環境事務所等の様々な組織のスタッフに参画を呼びかけてきた。

今回の2回のワークショップでは、ガイドラインの作成まで進まなかったものの、課題の共有・具体的改善点の洗い出しができた。今後、ガイドラインの作成に向け、活動を進めていく予定である。